

Lecanora muralis (Schreb.) Rabenh. は日本新産の地衣類であり、1970年の夏、黒川道博士によって北海道枝幸郡斜内山道の海岸岩上で大群落をなして生育するのが発見された。さらに同博士が青森県八戸市郊外で採集された標本1点も本種と同定される。*L. muralis* は外観上朝比奈博士によって越後国から報告(1958)された *L. alphoplaca* Ach. に似ているが下皮層がないことと、ノルスチクチン酸を含まない(髓は P-, K-) ことで後者とは容易に区別される。

○ハチジョウナデシコについて (常谷幸雄) Yukio JOTANI: On *Dianthus hachijoensis* Nakai

ハチジョウナデシコ *Dianthus hachijoensis* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 35, p. 150 (1921) は、小笠原父島扇浦で栽培されていたものに基づいて記載されたものであり、これはもと八丈島から移植されたものであるといわれるが、*D. hachijoensis* Nak. がそのまま、または疑文符をつけてヒメハマナデシコ *D. kiusianus* Makino の異名として用いられていることがある。著者は第二次大戦以前に東大理学部で標準標本を見せてもらい、ハチジョウナデシコとヒメハマナデシコが全く関係のないものであることを知った。その後このような植物が八丈島に現存するかどうかについて長い間留意してきたが、1974年7月八丈島西山(八丈富士)の西北麓永郷の集落附近でそれらしいものに出会い、腊葉にしたものを東大所蔵の標準標本と対比したが、互によく符合することを知り、八丈島に現存することが明らかになった。しかしこれは栽培品の逸出したものと考えられ、八丈島固有のフロラからは除くべきものである。なお *D. hachijoensis* Nak. の名は、*Dianthus Buergerii* Miquel と書き改められていることを附言する。

終りに東大所蔵の標準標本閲覧の便宜を与えられた大橋広好博士並びに大場秀章氏に感謝の意を表する
(東京農業大学)

□三省堂編：コンサイス地名辞典日本編 B6版 1287+43頁、2500円、1975年1月。全国の地名20200項目を、発音の五十音順に並べ、行政区画による位置、社会科的解説、地名の由来などが記されている。巻末には字画による索引がつけられている。谷岡武雄、山口恵一郎両氏の監修により、それぞれの専門家の協力の下に、9年を費して編集されたもので、従来このようなハンディで多項目な地名辞典は無かったので画期的な仕事と云えよう。分布を扱う研究者にとってその有用さは説明するまでもないだろう。
(金井弘夫)